

最優秀賞

見えない線を越える勇氣

の「一言」

比良松中学校2年

植田 うえだ 美遥 みはる

私は中学生になり、新しい環境に身を置きました。新しい友達との出会いに期待しつつ、最初は少し緊張しながら学校生活を送っていました。

席替えて新しい班が決まったとき、私の班には、少しおとなしくて、自分から積極的に話すタイプではないAさんがいました。彼女は、いつも静かに私たちの話を聞いて、

頷いてくれることが多くありました。ある日の総合学習の時間、班で一つのテーマを決めて話し合うことになりました。みんなで自由に意見を出し合う中で、いつの間にか、Aさん以外の四人で盛り上がっていました。「ねえ、このテーマ面白いんじゃない?」「いいね、それで行こう!」と、話はどんどん進みます。Aさんは、ただ静かに座っていました。時々、何か言いたそうに口を開きかけるのですが、結局何も言わず、また伏し目がちになってしまふのです。その日の話し合いが終わった後、私は少し胸にモヤモヤとしたものを感じました。彼女が何も言わなかったのは、本当に意見がなかったからだろうか?それとも、意見を言う機会がなかっただけなのだろうか?班は、みんな協力して活動するものなのに、彼女だけが、まるで「線」の外にいるかのように見えませんでした。そのとき、私は「仲間外れ」というものが、必ずしも目に見える形だけではないということに、気づかされた

のです。

その出来事以来、私は班の中での彼女の様子を、以前よりも注意して見るようになりしました。グループワークで役割分担を決める時も、彼女にはあまり声がかからない。昼休み、班の友達が固まって話している時も、彼女だけが少し離れて座っている。みんなが悪気なくやっているように見えたが、彼女の表情は、どこか寂しそうで、次第にうつむくことが多くなっていききました。彼女は、いつも私たちの声を聞いてくれるのに、彼女の声は私たちに届いていない。そんな一方通行の関係が、どんどん深まっていくように感じられました。

私はなぜこんなことが起こるのだろう、と考えました。彼女は、静かだけれど、いつも真面目に話を聞いてくれるし、頼んだことはきちんとしてくれる。決して、何か悪いことをしているわけではないのに、なぜ仲間外れにされてしまうのだろう。それは、もしかし

たら、私たちの中に、「積極的に話す子」や「明るい子」が「良い」という、無意識の決めつけがあったからではないか。自分と違うタイプの子を、どう扱っていいか分からず、結果的に遠ざけてしまっていたのではないか。そう気づきました。そして私は決意しました。この「見えない線」を、私から越えてみよう、と。

次の総合学習の時間、再び班で話し合いが始まりました。今回も、いつものように彼女以外のメンバーで話が進み始めます。私の心臓はドキドキと音を立てていました。あの時のモヤモヤと、「何もしない後悔」を思い出すと、勇気が湧いてきました。私は、話し合いの途中で、みんなの言葉をさえぎるように、少し大きな声で彼女に話しかけました。「ねえ、Aさんはどう思う？ Aさんの意見も聞かせてほしいな。」私のたった一言に、班の全員が、そしてAさん自身も、驚いたように私を見ました。彼女は一瞬、

戸惑った表情を見せましたが、すぐに小さな声で自分の意見を話し始めました。すると彼女の意見は、私たちには思いつかないような、とてもユニークで面白いものでした。それからみんなは彼女の意見に耳を傾け、どんどん新しいアイデアが生まれていったのです。彼女の表情も、みるみるうちに明るくなっていきました。私のたった一言が、彼女の心を解き放ち、班の中にあつた「見えない線」を消してくれたのだと、感じられました。

この経験を通して、私は「言葉の力」の偉大さを改めて実感しました。言葉は、ただ音として発せられるだけでなく、そこに込められた「勇気」や「思いやり」が、相手の心に光を灯すことができます。しかし、残念ながら、言葉は常に光をもたらすわけではありません。インターネットやSNSが普及した現代では、心無いたった一言が、たくさんの人の心を深く傷つけ、時にはその人の人生を大きく変えてしまうほどの悲劇を引き起

こしています。言葉には、たとえ匿名であっても、相手の心を深く傷つけ、その人の人を権を踏みにじる力があります。では、私たちはどうすればいいのでしょうか。私は、まず「気づく」ことが大切だと考えます。誰かの困っている姿、誰かの心のSOSに気づくこと。また、自分自身の中に、無意識の偏見や、決めつけがないかに気づくこと。そして、その「気づき」を行動へとつなげる勇気を持つことです。あの時、私が彼女に声をかけたように、ほんの小さな一歩でもいい。その一歩が、誰かの心を照らし、そして、私たちみんなが、それぞれの個性が輝き、誰もが安心して過ごせる社会を築いていけることを願って。

普通とは

十文字中学校一年

さとう のぞみ
佐藤 希美

みなさんは「普通」という言葉について考えた事がありますか。「普通」とはどういう事だと思えますか。何気なく使っている言葉ですが、「普通」とは何なのか考えたいと思ったきっかけがあります。それは、ある日の夕食の事です。家族みんなでカレーライスを食べている時にふと周りにいる家族を見てみました。父や母はカレーとご飯を少しずつ混ぜながら食べていて、妹達はご飯が見えなくなるようにカレーをかけて食べていました

た。けれども私はカレーとご飯が混ざるのが嫌でカレーを先に食べてからご飯を最後に食べていました。そこで、同じ環境で過ごした家族でも食べ方が違う事に気が付きました。私の食べ方を見ていた母に「普通に混ぜて食べた方がおいしいよ。」と言われ、私の食べ方は普通ではないのかと不思議に思いました。

そこで、私の思う普通とは何か考えてみる事にしました。まず、「普通」という言葉を辞書で調べてみました。すると一般的に広く通用する状態と書かれていました。しかし、例え、少数派であったとしてもそちら側からしてみればそれが普通という事になります。だから、普通という言葉はすごくあいまいな言葉だと思いました。あいまいな言葉ですが、日常生活で「普通」という言葉はよく耳にします。「普通」とはどういう時に使い、どのような思いで言っているのかを考えてみました。まず、夕食のカレーライスの事からです。

母の食べ方は母にとっては普通ですが、私も自分の食べ方が自分にとっては普通だと思っています。この事から、2人とも自分基準で普通という言葉を使っている事が分かります。人によって考え方や感じ方が違うので、普通という言葉は一人一人違うものだと感じました。

普通という言葉はまるで、自分の意見を正当化するための言葉にも受け取れます。そのため、自分基準で普通という言葉を使っていると友達や誰かを傷つける可能性があると思いました。例えば、私は運動が苦手で特に水泳はすごく苦手です。泳げない時に「普通、このくらいできるんじゃない。」とか言われてしまうとすごく悲しいし悔しく思います。

そういう悲しい思いをみんながしないために言い方を工夫したり、お互いの考えや個性を認め合ったりする事がとても大切だと思いました。そうすれば、みんなが楽しく過ご

せる日々が増えると思います。そのためにも私は人を思いやる心を忘れず、お互いがお互いの事を尊重できるようなコミュニケーションをとる事を日々心がけて生活していきたいです。そして、誰もが傷つく事なく楽しいと思える事が「普通」になればいいと思いました。

支え合って生きていく

十文字中学校3年

ひの
日野 蓮太
れんた

「ドーン」と大きな音が会場に響く。私は空手の試合中に大きく滑り、左手から地面に着きながら落ちていった。試合中はアドレナリンが出ていたので痛みを感じず、そのまま試合を続行した。試合は優勝することができたが左手が次第に痛みを感じてきた。すぐに左手を冷やしたり、固定したりしながら病院に向かった。病院に着いてレントゲンなどを受けた。結果は骨折だった。今日から夏休み中は包帯を巻きながらの生活だ。

この時はまだ日常生活は大丈夫だろうと思っていた。

家に帰り着いて、まず、洋服を着替えようとしたら左手が使えないので思うようにTシャツを脱げず、ズボンを両手で下げることもできなくて着替えだけで一苦労だった。次にペットボトルのふたを開けることに苦戦した。ペットボトルのふたを開ける時、いつも左手でペットボトルを支えて利き手である右手の指でキャップを回して開けていたが左手が使えないので開けることができず、母に開けてもらった。また、お風呂に入る時も苦戦した。左手が使えないので、全部右手で髪を洗ったり、体を洗ったりした。お風呂から上がった後にできなくて一番嫌だったのがドライヤーでセンターパートをセットできないことだった。このようなことから体の一部である左手が使えないだけで不便なことだらけだと知った。

世の中には障がいをもった人がたくさんい

る。私が今左手が使えないように体の一部が使えない身体障がいや、生活に関わる能力の発達に支障が出てしまう知的障がい、精神や行動における特定の行動を呈することによって生活する上での機能に支障が出てしまう精神障がいなどさまざまな障がいがある。私は骨折で安静にしていたら治るけど障がいを持っている人の中にはその障がいと一生付き合って生きていかないといけない人たちもいる。

そんな中、障がいをもってしている人たちに對して差別や偏見が生まれている。職場や学校などで嫌がらせやいじめを受けていることや差別的な言葉を言われたり、じろじろ見られたり、避けられたりすることなどの差別や偏見が多く生まれてしまっているようだ。障がいをもってしているからといって差別や偏見をするのは間違っていると思う。なぜなら、障がいをもってしている人たちは、みんな同じ人間だと私は考えているからだ。

私はパラリンピックで活躍している選手たちに勇気をもらっている。なぜなら、障がいを負けずに自分の目標や夢に向かって一生懸命に取り組んでいる姿に心を打たれたからだ。特に心を打たれたのは、今年のパラリンピックで金メダルをとった車いすラグビーの選手たちの活躍である。みんなが金メダルを目指して力を合わせて戦っている姿に心を打たれた。ボールを相手から取った瞬間にみんな一斉に車いすに力を入れてゴールに向かって全力で動いている姿だ。普段車いすを全力で動かしているところを見たことがなかったのでよけいに心を打たれた。金メダルを取ったときに選手たちが笑顔で喜びを分かち合っていた姿にも心を打たれた。

今回、私は実際に左手を骨折して普段の生活が思うようにできない不便さを知った。不便さを知ったことで、障がいをもつ人たちが生活する大変さや、周りの人たちに助

けを借りて生きていけないといけないことを
知ることができた。だから、差別や偏見をせ
ず、みんなと支え合って生きていけないとい
けないと思った。

これから、障がいに対する差別や偏見をな
くしていき、誰もが支え合って楽しく生きて
いける世界にしていきたい。

いじめはよくない

比良松中学校3年

なかむら
りきよう
中村 力彪

「冗談だよ。」その言葉でごまかされたいじめを、私は何度も見てきました。友達の間で容姿や持ち物をからかったり、仲間外れにしたり、言っている本人は軽い気持ちでも、言われた側にとっては心に深い傷を残します。私はそうした場面に出会うたびに、「これは本当に笑って済ませてよいことなのだろうか」と考えさせられます。

いじめは、殴る・蹴るといった目に見える暴力だけではありません。言葉で人を傷つけ

たり、無視したり、SNSで悪口を書き込むことも立派ないじめです。特に最近では、スマートフォンを使った「見えないいじめ」が広がっています。教室では仲良くしているのに、ネット上では仲間外れにされている。そんな状況を経験した知り合いが、ある日突然学校に行くことができなくなりました。私はその時いじめが人の心をどれほど追い詰めてしまうのかを痛感しました。

私自身も、からかわれて苦しかったことがあります。小学校のとき、些細な失敗を繰り返して笑われ、教室で手を挙げるのが怖くなった時期がありました。「みんなの前で間違えたら、また笑われる。」そんな思いが頭から離れず、勉強に対して自信を失ってしまいました。その経験から、言葉は時にナイフのように人を傷つけることを身をもって知りました。

いじめをなくすためには、まず「自分は関係ない」と思わないことが大切だと思います。

いじめを見て見ぬふりをすることは、加害者に加わるのと同じことです。もし誰かが笑われたら、笑う側ではなく「大丈夫？」と声をかける側に回るべきです。しかし実際には「自分まで標的にされるかもしれない」と不安になり、勇気が出ないことも多いのではないのでしょうか。私も過去にそのような場面でもできず、後悔したことがあります。だからこそ、これからは小さな一歩でもいいから、いじめを止めるために行動したいと思います。

いじめを根本的になくすには、一人ひとりが「人権」について考えることが必要です。すべての人はかけがえのない存在であり、同じように尊重されるべきだということを、改めて心に刻むべきです。相手の立場に立って考えれば、軽はずみな言葉や行動がどれほど相手を傷つけるかに気づくはずで、そして「もし自分だったら」と想像できる人が増えていきます。

また、学校や家庭の中で「安心して気持

ちを話せる環境」をつくることも大切です。いじめられている人が声を上げられないのは、「どうせ誰も助けてくれない」と思ってしまうからです。だからこそ、周りの大人や友達が「いつでも相談していいんだよ」という姿勢を示す必要があります。私は友達が悩んでいるときには、まず耳を傾けてあげたいと思います。解決できるかどうかよりも、「味方がいる」と感じてもらうことが大切だからです。

人権とは、誰もが持っている「幸せに生きる権利」です。いじめは、その権利を奪う行為です。学校は学びの場であると同時に、人とのつながりを育む場でもあります。その学校で人権が守られないのなら、未来への希望も失われてしまいます。だから私は、いじめをなくすために行動し続けたいです。

これから私は、まず自分の言葉と行動に責任を持ちます。冗談のつもりでも、相手が嫌な思いをするならそれはいじめです。相

手の立場に立ち、「その一言で相手はどう感じるか」を考えながら日々を過ごしたいと思います。そして、いじめを目にしたときには勇気を出して声をあげられる自分になりたいです。

いじめをなくすことは簡単ではありません。しかし、一人ひとりが小さな意識を変えることから始めれば、必ず大きな力になります。私は将来、どんな立場にいても「人を尊重する心」を忘れず、周りの人と共に安心して過ごせる社会を築いていきたいです。